

令和元年度

連携活動記録報告書

VOL. 10



令和2年3月

山形大学附属学校

目 次

はじめに	・・・・・	1
I 連携活動の記録		
令和元年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題	・・・・・	3
令和元年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題	・・・・・	7
令和元年度の活動を振り返って	・・・・・	8
1 幼小中連携		
(1) 幼小連携	・・・・・	1 4
(2) 幼中連携	・・・・・	1 9
(3) 小中連携	・・・・・	2 1
2 特別支援学校連携	・・・・・	2 3
II 特別寄稿		
「山形大学地域教育文化学部・大学院教育実践研究科と 附属学校園との共同研究について」	・・・・・	2 9
III 山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程		
附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める 部会に関する申し合わせ	・・・・・	3 6
IV 資料		
附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める 部会に関する申し合わせ	・・・・・	4 0
附属学校研究・連携推進委員名簿	・・・・・	4 2

はじめに

山形大学附属学校では、4つの学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行うことを目的として、「附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の2つの部会を設置している（もう1つの「共同研究推進部会」については『共同研究報告書』を参照されたい）。本活動報告書は、2019年度の山形大学附属学校園における「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の活動の記録をまとめたものである。

山形大学附属学校では、子どもたちの交流活動や連絡会、研修会などを通じて、4校園の教員が互いの教育現場を参観し、意見や情報を交換する中で、それぞれの教育目標に応じた特徴を持つ各学校園の教育実践から、附属学校園における新たな連携のあり方を意識した教育方法の検討に取り組んでいる。また、山形大学附属学校には、特別支援教育コーディネータとメンタルケア・コーディネータ（平成23年度から）及び英語教育コーディネータ（平成27年度から）が配置されており、「まつなみ学習支援室」（平成24年設置）とともに、4つの附属学校園にわたる多面的な連携を担い、教育支援を行っている。

国立大学附属学校に求められている連携のあり方は、単なる交流活動にとどまるわけにはいかない。幼稚園から小学校、小学校から中学校という学びと成長のステップは、附属学校という特性を生かした一貫した教育理念を反映したものでなければならないだろう。山形県教育委員会の「探究型学習推進プロジェクト」の推進協力校である山形大学附属学校としては、幼稚園での遊びが子どもたちの探究活動の始まりであり、小学校での探究的な学びへとつながるものと連続的に捉える必要がある。さらに、小学校で育まれる地域に根ざした探究的な学びの姿勢は、中学校ではより広く世界に視野を広げつつ、関心領域の深い理解に届く学習へと展開され、その先に高等学校や大学における探究的かつ主体的な学習者が着実に成長していくことが期待される。また、幼稚園から始まる共同生活において困難を抱えがちな子どもたちの支援においても、多様性を許容するインクルーシブ教育の観点から、小学校、中学校と進む中で、学校全体で子どもたちのより豊かな成長を促すようなしくみを構築することが求められている。このような課題への取り組みは、公立学校のモデルとして全国の国立大学附属学校に要請されているものもあるが、山形大学附属学校における連携活動は、まだそこには十分に応えているとは言いがたい。単発的な連携活動を超えて、一貫教育の理念に支えられた連携的な教育の実質化が今後の課題である。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見やご要望をいただければ幸いである。

令和2（2020）年2月

山形大学附属学校運営部長 鈴木 亨

I 連携活動の記録

令和元年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その1

附属小校長 樋口潤一

メンタルケアコーディネータ（中学校籍 教諭）
特別支援教育コーディネータ（特別支援学校籍 教諭）

鎌田 弘子
早坂 美紀

1 配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

○教育相談と特別支援教育において、校種間の連携及びその一貫性を図る。

○附属学校園全体の特別な支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。

○附属学校園全体の心の問題を抱える幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。

2 主な職務

○幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核

○該当する幼児児童生徒への直接の支援・指導

○学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援

○各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携

○まつなみ学習支援室における支援員への専門的な助言

3 今年度（配置9年目）の基本的な考え方

【目標】

- ・早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図ること。
- ・各学校園でコーディネータを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図ること。
- ・個に応じた支援のあり方（当該児童生徒のみならず保護者支援や担任支援も含む）を探究すること。
- ・年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの12年間継続して課題解決に向かっていくこと。
- ・まつなみ学習支援室の支援員を適切に活用し、別室での学習・取り出し指導の充実を図ること。

【役割】

- ・附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつないでいく。
- ・各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導支援を行う。

【具体策】

- ・各校園の状況を把握し、幼児児童生徒に係る情報をつなぎ、校園間の指導・支援の一貫性を担保する。
- ・先進的・専門的な情報を収集し、各校園の教員に研修等を通して指導する。

4 今年度の成果 教育相談と特別支援教育における校種間の連携及び一貫性が強化された。

→幼稚園と小学校の「個別の教育支援計画」の様式を統一することで、より効率的に情報共有を図ることができ、適時・的確な個別対応を行うことができた。

→保護者面談の計画的・継続的な実施、関係機関との連携窓口としての機能が定着してきた。

○コーディネータ及び支援員による丁寧な幼児の実態把握と情報共有がなされ、小学校進学に向けた円滑な指導の連携が一層図られるようになった。

- ◎指導対象幼児・児童・生徒についての観察や分析、それをもとにしたアセスメントの質が向上してきた。
 - ◎校長・教頭・教務主任・まつなみ支援室長・養護教諭・支援員との「ランチ・ミーティング」を毎日行うとともに、コーディネータやSCも含め状況に応じたケース会議を適時開催できたことで、迅速かつ的確な情報共有が図られ、未然防止と早期対応が可能になり、組織的支援の充実を図ることができた。
 - ◎異校種教員が常に同僚として職場に勤務し、児童の実態に即して適時にコーディネートしていることで、それぞれの教育観の日常的な交流が図られ、教職員の視野が広がってきている。
- ◇コーディネータを講師として、ソーシャルスキル・トレーニング等の研修を実施しており、今後も継続して研修を行うことで、計画的な教員の資質・能力向上を図っていきたい。

令和元年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その2

附属小校長 樋口潤一

英語教育コーディネータ（附属小学校籍 教諭） 佐藤 大将

1 配置のねらい

- 附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。
- グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。
 - 附属学校園全体の英語教育における幼児児童生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。
 - 異学校種間の英語教育指導のあり方に関し、地域のモデル的実践を行うとともにその周知を図る。

2 主な職務

- 大学教官との連携をとりながら、附属学校全体の英語教育における幼児児童生徒への支援・指導の充実に向けて、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
- 小学校における外国語科及び外国語活動の授業において、担任と連携し学習指導やその補助を行う。
- 英語教育の充実強化・高度化に対応するための指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
- 附属学校全体の英語教育とその支援・指導を担当する教員として、幼小中一貫教育を支える。
- 大学・学部等における研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質の向上に努める。

3 今年度（配置5年目）の基本的な考え方

【目標】

- 新学習指導要領全面実施に向けた外国語科及び外国語活動の指導充実と年間指導計画の策定

- ・体制整備に向けた情報収集や本校教員の資質向上を図るための情報提供

- 附属中学校の英語科と小学校の外国語科及び外国語活動の接続を視野に入れた連携強化

【役割】

- 学級担任やALTと連携して、外国語科及び外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。
- 県や市の研修を受けるとともに、地域の小学校の研究会・研修会等において指導・助言を行う。

- 附属中学校英語科の授業づくりへの支援（T.Tでの授業参加）

- 附属小学校外国語科及び外国語活動への附属中学校英語科教員の参加をコーディネート

【具体策】

- 5～6学年における外国語科（週12コマで年間420コマ）を担当する。

- 3～4学年における外国語活動（週5コマで年間175コマ）を担当する。

- 研修会において、外国語科及び外国語活動の授業を提案する。

- 新学習指導要領全面実施に向けた、年間指導計画を策定する。

- 研修や参観した公開授業等の情報を整理し、校内研修会等で報告する。

- 毎月月曜日に附属中学校英語科でのT.T指導後の振り返りと打合せを行う。

- 4 今年度の成果 →年間指導計画に基づき、P D C Aを意識して、今年度も加筆修正しながら改善を進め、新学習指導要領の全面実施に向けた取組の一層の充実を図ることができた。
- 探究型学習研修会（6月）における授業提案と、カリキュラム研修会（2月）における学級担任とのT・T指導の提案を行うことで、地域の小学校へのモデル実践を示すことができた。
- A L T 2人体制になったことを生かし、外国語科及び外国語活動へのA L Tの配置率が上がり、コーディネータ・担任・A L Tが協働で児童の実態に合った実践を行えるようになった。
- 外部研修の講師を行うなど、本校の取り組みを地域に還元する機会の充実が図られた。

◇来年度は、小中連携を強化した外国語教育の実効的な取組を一層推進していきたい。

令和元年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題

附属小校長 樋口潤一

1 設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

①附属学校園全体の特別な支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実と体制整備の推進を図る。

②附属学校園の特別支援教育並びに教育相談機能の一層の充実と活用を図る。

○県内小学校のLD等通級指導教室のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

2 主な職務

学級担任、各コーディネータ、SC（必要に応じて、中学校のSC及び大学の心理教育相談室のスーパーバイザー）と連携して主に以下の職務を行う。

①学習面、生活面での支援（行動観察、TT指導、取り出し個別指導、諸検査の実施）

②メンタル面での支援（教育相談、アドバイス等）

③保護者との面談、教育相談

○研修会等の周知・啓発活動の計画・実施

3 支援室の運営

・室長：小学校教育相談主任 長岡 初美教諭（附属小学校在籍）

・副室長：特別支援教育コーディネータ 早坂 美紀教諭（附属特別支援学校在籍）
：メンタルケアコーディネータ 鎌田 弘子教諭（附属中学校在籍）

・支援員：1名・・・支援員（週5日5h勤務）

・スーパーバイザー：佐藤 宏平氏（山形大学地域教育文化学部准教授）

4 今年度の成果 →附属学校園間の情報共有が迅速かつ的確に図られ、特別な支援を必要とする幼児児童への支援が充実した。

→心理検査等による客観的なデータの収集・活用など、専門的な支援が可能になった。

→幼稚園児と小学校低学年への早期発達支援及び、支援員の幼児児童への個別的・継続的支援が有効に機能した。

- ① コーディネータの専門性を生かしたアドバイスを適時に得ることができた。
- ② 個別の指導計画及び保護者の了解を得た教育支援計画に基づいて支援を行い、本人及び保護者の安心感・信頼感の醸成につながっている。
- ③ 附属学校園教員の特別支援教育に対する意識が高まるとともに、各学級・学年における特別支援教育力の向上につながった。
- ④ 来室時に限らず、教室や園に出向いてのアセスメントや支援により、支援室の学びと通常の学びのつながりを確かにすることことができた。

5 今後に向けて

- ① 附属学校園教員の特別支援教育力の更なる向上をめざし、教職員及び保護者の研修等を計画的・継続的に実施する。
- ② 特別な支援を必要とする児童に対する一貫した支援ができるよう、幼・小・中の連携を一層強化していく。

令和元年度の活動を振り返って 1

メンタルケアコーディネータ 鎌田 弘子

1 活動報告

(1) 特別支援教育コーディネータとの連携

① 個別の教育支援計画・個別の指導計画について

- ・ 小・中学校で共通理解と共通実践を一層進めることを目指し、共通した様式で個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成することにした。
- ・ 中学校の生徒理解研修会の場において、特別支援教育コーディネータの早坂美紀先生を講師に迎え、「支援計画や指導計画に関する施策について」「発達障害の正しい理解や合理的配慮について」の講話をいただいた。また、中学校の担任が作成した個別の支援計画及び指導計画について助言をいただいた。

② 第2回小中連絡会（小・中学校の情報共有）

- ・ 春に行われた小中連絡会の際に、特別支援コーディネータから特別な支援が必要な生徒を抽出してもらい、小学校時の様子や支援について担任より情報提供してもらった。また、中学校入学後の様子や現状を基に、今後の具体的な支援策について助言をいただいた。

(2) スクールカウンセラー（SC）との連携

① カウンセリングの日程調整・引き継ぎ

- ・ 保護者や生徒から予約が入った際は、なるべく希望に添うように日程調整を行った。
- ・ カウンセリング中にSCが相談者（生徒・保護者）から了解を得た内容や相談者の希望で学校に伝えて欲しいという内容について聞き取り、確実に学年や担任に伝えた。

② WISC検査

- ・ 夏休みを利用して生徒1名に実施した。結果を受けて、5教科それぞれにどのようなつまずきがあるかを毎週1時間個別指導していただいた。さらに今後、支援策についてSCより助言を頂き、保護者や担任、教科担当者にも伝える予定である。

③ スクリーニングの実施

- ・ 10月に中学1年生を対象に実施。授業中の生徒の様子を観察、気になる生徒について具体的に教えていただき、さらに支援策について助言をいただいた。

④ 学年講話の実施

- ・ 1、2年生を対象に、ストレスマネージメントの講話をしていただいた。

⑤ ケース会議の実施

- ・ 必要に応じてケース会議を実施し、支援策を検討する場面では専門家の立場から適切な助言をいただいた。

⑥ 教育相談部会の実施

- ・ 生徒の情報交換の際、特別な支援が必要な生徒への具体的な支援策について専門的知見からご指導いただいた。
- ・ 自閉症スペクトラムやストレスマネージメントについて勉強会を行った。

(3) 養護教諭との連携

- ・ 毎日、生徒の情報交換と今後の対応について相談し、教員や生徒にあたった。
- ・ 保健室来室者へ声をかけたり、チャンス面談を行ったりするなどして学年や担任へ繋いだ。
- ・ SCとの情報交換を通して、今後の生徒への対応について相談した。
- ・ 別室教室の運営について相談しながら進めた。
- ・ 教育相談に関しての知識や技能について助言をいただいた。

(4) 担任・教科担任との連携

- ・ 「スズキ校務」を活用し、その都度生徒の様子を記録し、担任や学年担任団に情報提供した。
- ・ 担任、学年担任団との情報交換を積極的に行い、今後の対応について検討した。状況に応じて校長や教頭に報告し、SCに繋いだりケース会議を開いたりした。
- ・ 学級全体や特別な支援が必要な児童・生徒への支援方法について確認し、指導にあたった。
- ・ 担任と保護者の関係を支える対応の検討を行い、必要に応じて保護者面談に同席した。
- ・ SC、特別支援教育コーディネータからの情報を報告した。
- ・ 別室教室で過ごす生徒のために授業内容や学習支援について確認したり、授業に出られるような対応策を検討したりするなどした。

(5) 教育相談部会の実施

- ・ 週1回、1時間程度部会を設け、生徒の情報交換を行い、必要に応じて支援策の検討を行った。
- ・ 教育相談アンケートを年5回実施し、生徒の現在の状況や悩み、心配事を把握し、二者面談で対応するようにした。
- ・ エンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを計画し、学級で実施できるようにした。
- ・ Q-U検査を年2回実施し、Q-Uの結果を受けて分析方法を提供したり、担任と個々の対応策について検討したりした。

(6) 不登校生への対応

- ・ ケース会議を実施し、生徒の状況把握と対応策の検討を行った。
- ・ 必要に応じて生徒・保護者面談を行った。
- ・ 担任から家庭訪問や電話での様子を聞き、対応策を検討した。

(7) 別室で過ごす生徒への対応

- ・ 個別に月毎の目標や具体的な取り組みを確認し、毎週、時間割を作成して目標に向かって学習できるように環境を整えた。
- ・ 別室で過ごす生徒の学習スペースを確保し、毎時間、担当教員（空き時間の教員、学生ボランティア）を配置した。
- ・ 別室教室で過ごす生徒が授業に入れるように教科担任と連携して学習支援を行うと共に、SCや養護教諭の指導の下、エンカウンターやソーシャルトレーニングを行い、人との関わり方について学ぶ機会を取り入れた。

2 成果と課題（成果○、課題△）

○個別の教育支援計画および個別の指導計画の様式を小学校、中学校で統一することで、児童生徒の情報交換が密になり、つながりのある支援を行うことができた。

○特別支援教育コーディネータから支援計画および指導計画の具体的な記入方法や合理的配慮について学ぶ機会を設け、生徒の支援に生かすことができた。

○不登校生徒への対応については、担任だけに任せることなく校長、教頭を含めた複数の教員がチームとなり、ケース会議で対応策を検討し支援にあたることができた。

○別室で過ごす生徒の学習スペースを確保し、個別の時間割作成、担当教員の配置、さらには教科担任との個別学習を設け、生徒が安心して教室で授業が受けられるような支援を計画かつ継続して行うことができた。

△今年度、小学校の児童に関わる機会が全くなかった。小学校高学年で支援を要する児童と関わる機会があると、中学校に進学した際、少しでも安心して学校生活を送ることができる。さらに小学校、中学校でつながりのある支援が可能となり、「中1ギャップ」の解消も期待できると考えられる。

令和元年度の活動を振り返って 2

附属学校特別支援教育コーディネータ 早坂 美紀

1 主な活動の報告

(1) 教育的支援

主に、幼稚園、小学校での個別の教育的支援を行った。

幼稚園では、担任と情報共有しながら、園生活の流れの絵カードを作成したり、スムーズな片付けや活動への切り替えが難しい園児に対して、片付けの手順表やごほうびカード等を作成したりして活用している。なかなか集中して取り組めなかつた園児も、少しずつ頑張って取り組めるようになってきた。

小学校では、年度初めの授業を巡回したり、休み時間の様子を見聞きしたりしながら個々の実態を把握した。また、個別の教育支援計画を作成している児童においては、これまでの記録や校内の特別支援教育コーディネータ、担任からの情報を基に、今年度の個別の指導計画を立て、個別の指導をしてきた。主に、「アンガーマネジメント」、

「アサーショントレーニング」、「SEL-8S」、個別の課題にそった SST を行い、指導の記録を回覧することで情報を共有してきた。担任も同席しての SST を行ったケースでは、共通理解を図りやすく児童の対人関係の課題に、よりせまった実践的な指導ができた。また、幼稚園から個別の教育支援計画を作成して引き継いでいるケースでは、担任やコーディネータ、支援員と協力しながら本人の特性や性格を考慮した手厚い支援をしたこと、年度初めの学校生活がスムーズにいった。具体的には、専用のかごを準備した支援がある。年度当初、授業の合間に作った折り紙を机に出しっぱなしにすることがあり、引き出しに片付けるのが困難であった。本人と相談して専用のかごを席の近くに用意したことで必要なものは机に置かないことが身につき、かごを撤去した後も継続できている。日々の学校生活で課題がある場合も、定期的に保護者面談をすることで支援の共通理解を図っている。

(2) ケース会や情報共有

今年度は、特別支援学校、幼稚園、小学校でのケース会にかかわらせていただいた。

特別支援学校では、外部からの相談依頼件数は少なく、校内相談のケース会に参加した。検討方法としては、「ホワイトボード教育相談」を用いている。

幼稚園では、今年度は主に就学にかかわってのケース会や情報共有を行った。

小学校では、管理職や校内の特別支援教育コーディネータ、養護教諭、支援員等とランチミーティングを行い、個別の支援をしている児童、気がかりな児童等についての情報共有を行っている。また、必要に応じて校内の特別支援教育コーディネータが中心となりケース会を開き、管理職、学年の担任団、校内の特別支援教育コーディネータ、附属学校特別支援教育コーディネータ等で支援方法を共有している。さらに、専門家との連携が必要なケースにおいては、スクールカウンセラー、大学のスーパーバイザーとも連携し助言をいただいた。

(3) まつなみ学習支援室および支援員等との連携

まつなみ学習支援室が設立され今年度で8年目となった。幼稚園の保育支援は、支

援員とメンタルケアコーディネータ、特別支援教育コーディネータ3名が交代で勤務しながら行っている。小学校においては、支援員と特別支援教育コーディネータが交代で勤務し、かつ週に1回は同時に勤務する体制となった。主に個別の学習支援や学級集団への支援、母子登校の児童の支援等において、まつなみ学習支援室支援員との連携を図った。

小学校の個別の学習支援では、主に対人関係に課題のある児童の支援を行った。支援員も学習支援に入れるよう、週1回打ち合わせを行い、担任との情報共有も大切にし、本人の頑張りと課題を随時把握しながら行った。また、母子登校の児童については、授業中や休み時間に支援員が寄り添ってきたことで、少しずつ児童の気持ちの安定が見られ、良い方向へ向かっている。

幼稚園での支援では、担任との情報共有や有効と思われる教材の提案等を行っている。小学校においては、個別の学習支援の記録、授業参観時の気がかりな児童についての記録を提出している。管理職や担任、養護教諭等、関係者が目を通すことで、指導・支援や児童の様子について共通理解を図ることができ、その後の指導・支援に活かすことができている。

(4) 保護者支援

保護者支援においては、幼稚園と小学校においてかかわらせていただいた。特に就学にかかわる保護者支援においては、養護教諭（特別支援教育コーディネータ）が中心となり面談を設定し、園生活の様子や本人の成長とこれからの課題について、附属学校特別支援教育コーディネータも同席し就学先についての話をさせていただいた。

小学校では、幼稚園からの継続した支援が活かされ、保護者との定期的な面談がスムーズにいっているケースもある。保護者の家庭での困り感、子育てへの悩み等は、担任や校内、附属学校特別支援教育コーディネータだけでなく、スクールカウンセラーとも連携しながら行っており、より保護者に寄り添った支援体制が整っている。また、保護者からの要望により面談を行い、個別の教育支援計画策定に至ったケースもある。担任と保護者との日々の情報共有がスムーズだったため、個別の教育支援計画の作成、コーディネータの授業参観等への理解と協力が得られたのだと思われる。

2 今後の取り組み

- (1) ケース会や保護者支援等、各校園内のチーム体制については、各校園の特別支援教育コーディネータが中心となり、必要に応じて大学や外部機関の専門家との連携が図られ、相談体制が確立している。特に、医療との連携を図っているケースについては、学校生活の記録を基にした情報提供がより必要になると思われるため、適切な情報共有の仕方を工夫していく必要がある。
- (2) 特に小学校において、ソーシャルスキル面で個別の学習を行う児童の増加に伴い、放課後等の時間を工夫した、より計画的な指導が必要である。支援員との協力の仕方を工夫する必要もある。
- (3) 附属学校園のコーディネータの体制ができて9年、まつなみ学習支援室の運営も8年が経過し、各校園の支援体制も確立してきている。より複雑なケースも見受けられることから、今後はより専門家、外部機関との連携を図ったり、保護者との情報交換を密にしたりしながら、支援体制を整えていく必要があると思われる。

令和元年度の活動を振り返って 3

英語教育コーディネータ 佐藤 大将

1 活動報告

(1) 小学5・6年生における「外国語科」の授業・・・年間70時間×6クラス

「外国語を通じて、自らかかわりながら相手や他者とつながろうとする子ども」を目指し、外国語科の授業の新たな可能性について模索してきた。

今年度は、山形大学に通う外国人留学生10名と年間を通して関わることで、子どもが生の英語や外国の文化に触れ、コミュニケーションの難しさや大切さを学ぶことができたと感じている。初めは自己紹介からスタートしたが、交流を重ねていくうちに会話のテーマが「お互いの国の文化」や「山形のおすすめの場所」に変わっていったため、子どもの思いや願いに応じてカリキュラムを柔軟に組み替えながら学習を進めていった。



(2) 小学3・4年生における「外国語活動」の授業・・・年間35時間×7クラス

「Let's Try!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。歌やチャンツ、ゲームなどを楽しみながら外国語に慣れ親しむだけでなく、自分の思いや様々な情報を伝え合うことを大切にした授業づくりに取り組んできた。

4年生の授業では、テレビ電話システムを使ってインドの小学校と交流を行った。総合的な学習で調べた「山形のよさ」や「お気に入りの場所」を紹介するために、必要な英語を主体的に学ぼうとする子どもの姿が見られた。



また、外国語の授業における異学年交流として、4年生と6年生による合同授業を行った。一年間、同じ縦割り班で関わる先輩と後輩で自己紹介をするという状況設定が「聞きたい。」「話したい。」という意欲につながると感じた。

(3) 小中連携の取り組み

週に一度、コーディネータが中学1年生の授業に参加したり、中学校教員が小学校の授業に参加したりするなど、小中でお互いの授業を見合ったり、一緒に授業を行ったりする機会が増えた。今後も、「附属小中 CAN-DO リスト」を活用しながら、小中それぞれで目指す子どもの姿について議論していくことが、小中連携において極めて重要であると考える。

(4) 「外国語ルーム」の新設

今年度から新たに「外国語ルーム」を新設した。電子黒板、4線入りのホワイトボード、豊富な種類のピクチャーカード、様々な語彙や表現に触れることができる掲示、英語の辞書や絵本、様々な国の文化や言語を学習できる本、巨大世界地図、それぞれの季節に咲く花や植物の言い方を学習できるコーナー(ALTの発案)、タイピング練習や調べ学習ができるパソコンなど、子どもが外国語や世界の国々の文化について学ぶことができる環境整備を行ってきた。

(5) 研究会における授業提案

6月の探究型学習研修会では、第6学年外国語科「自分の国や地域のことを伝え合う」の授業を、2月のカリキュラム研修会では、第4学年外国語活動「お気に入りの場所を紹介しよう」の授業を提案し、県内外の先生方や学生と共に研修を深めることができた。「教科担任が行う外国語の授業の可能性」「外国人材の活用」「ALTとの連携」「ICTの活用」「担任と教科担任のTT」など、今後の外国語教育につながる様々な提案ができたと感じている。

2 成果(○)と課題(▼)

- 「附属小中CAN-DOLIST」をもとに、小中連携の第一歩を踏み出すことができた。
昨年度の卒業生を中学校に進学してからも継続的に指導することができるメリットは大きく、中学校教員と昨年度の学習の様子について情報交換をしながら、共に授業づくりを行うことができた。
- 「外国人材の活用」「インドの小学校との交流」「異学年交流」など、目的・場面・状況を工夫することで、子どもにとって必要感のあるやりとりが生まれる単元づくりを行うことができた。
- 「外国語ルーム」を新設し、効果的に活用することで、子どもが外国語や世界の国々の文化について豊かに学ぶことができるようになった。
- ▼ 来年度は小中連携の取り組みをさらに進めていく予定である。小学生と中学生の合同授業を企画し、その実践を県内外に発信していくことで、小中連携の一つのモデルを示していきたいと考えている。

【幼小連携：幼小連絡会】

幼小連絡会 ねらいと年間計画

(1) ねらい

- ・新1年生の学習や生活の様子の参観を通して、各児童の検討していきたい面や今後の課題について共通理解を図りながら、見通しをもつことができるようとする。

(2) 計画

期日	場所	窓口	内 容	附小担当	附幼担当
5月14日	附小	附小	第1回幼小連絡会 （附幼・一般） 1年生の児童の学習の様子を幼稚園教員が参観し、その後全体で話し合いをして情報交換をする。	教務 教頭	教務
11月21日	附幼	附幼	第2回幼小連絡会 小学校教員（1年担任・校長・教頭・教務・教務副・養護教諭）が幼稚園児の活動を参観し、それらをもとに幼小の学びや育ちについて共通理解を図る。	教務 教頭	教務
12月13日	附小	附小	1年生のフェスティバルに年長児を招待し、参観してもらう。 (インフルエンザのため中止。DVDを送った。)	井上	那須
1月21日	附小	附小	年長児が小学校に来校し、1年生の手伝いのもと、給食と一緒に食べる交流会を行う。	井上	那須
2月10日	附小	附小	第3回幼小連絡会 1年生並びに年長児に関わりある幼稚園担当が小学校1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務 教頭	教務
2月12日	附小	附小	生活科などの1年生の学習の様子を見学したり、一緒に活動に参加したりする。	1年担任	那須
2月17日	附小	附小	新入児情報交換会 （一般） 一般園の年長児に関わりある教員が1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務	なし

※ 太枠は、附属連携に関するもの

【幼小連携：幼小連絡会】

幼小連絡会 第1回報告

1 ねらい

1年生の学校生活の様子をもとに、幼小ともに子どもたちへのよりよい支援のあり方を考える。

2 日 時 令和元年5月14日（火）

3 場 所 ○学習参観 グラウンド・各教室 ○話し合い 校長室

4 出席者

附属小学校 橋口校長、高橋教頭、渡邊教務、長岡教務副、鈴木養護教諭、早坂特別支援コーディネータ、鎌田メンタルケアコーディネータ、井上1年主任、1の2担任青山教諭、1の3担任後藤教諭

附属幼稚園 村上園長、片山教務、奥山養護教諭、前年度年長児担任伊藤教諭

5 活動内容

①学習参観 1校時 8:55～9:40
グラウンド（チャレンジ記録会にむけての練習）
4校時 12:35～13:20
各教室（1組：国語、2組：算数、3組：みのり）

②話し合い 16:00～17:00 校長室

6 協議内容

（1）新1年生の様子について

井上主任より、今年度の学年経営および新年度の学校生活について説明があった。その後、各学級担任より、各クラスの児童の様子や特に附属幼稚園から入学してきた児童の特徴やよさについて、話題が出された。入学後、新入生として生き生き学ぶ姿や幼稚園のころの不安が解消され成長した様子について、幼稚園、小学校双方で確認された。

（2）話し合い

配慮を要する児童や支援の必要な児童について、幼稚園のころの様子や家庭での様子を情報交換し、今後の学校生活に生かしていく視点で話し合われた。PTA役員の選考なども含め、幼小で連携するために児童自身や家庭についての情報を共有することができた。また、附属幼稚園での遊びを通した学びの様子について情報提供していただき、小学校でのスタートカリキュラムに生かせることがないか、アイディアが生まれるきっかけにすることことができた。

（3）今後の幼小連携について

附属幼稚園で行っている学びが、小学校での生活でも生かされ、小学校での学びに繰りしていくように、スタートカリキュラムについて幼稚園と小学校が協力して研修していく方向性が確認された。

また、附属学校のよさとして、コーディネータの活用や教員の交流があるので、支援の必要な園児や児童についてコーディネータが継続して支援したり、互いの研究会に参加したりすることを今年度も進めていくようにしたい。

【幼小連携：幼小連絡会】

幼小連絡会 第2回報告

- 1 ねらい 幼児期の育ちと保育者の援助について理解し合い、幼小のつながりを考える。
- 2 日 時 令和元年11月21日（木）
- 3 場 所 山形大学附属幼稚園
- 4 参加者 附属小学校・・・樋口校長・高橋教頭・渡邊教務
1年生担任井上教諭・青山教諭・後藤教諭・鈴木養護教諭
附属幼稚園・・・村上園長・5歳児担任那須教諭・4歳児担任倉岡教諭
3歳児担任伊藤（真）教諭・片山教諭・奥山養護教諭
早坂特別支援コーディネータ
- 5 内 容 (1) 幼稚園の保育参観（9:00～13:30に適宜）
(2) 協議会（15:45～16:45） 幼稚園おはなしルーム
・5歳児後期の保育について
・本日の保育参観より（小学校の先生方撮影による写真をもとに）
・幼小連携の充実にむけて（今後の幼小連携の予定と確認）
- 6 話し合いの様子（一部抜粋）
 - (1) 5歳児担任より
 - ・間近に控えたステージフェスティバルに向け、子供たちの遊びの中からストーリーづくりをしているところである。ステージフェスティバルの取り組みを通して、改めて友達の良さに気づいたり、仲間意識がさらに深まったりしているを感じている。
 - (2) 1年生担任より
 - ・○児が、夏の保育参観からみて成長しているのを感じた。友達との関わりの中で遊びを断るにも「しっぽを触らないならいいよ。」など自分から条件を出し、友達の参加を認めようとしていた。幼稚園時の姿を知っていることで小学校での子どもも理解が変わってくるように感じる。
 - ・子供たちには遊びの世界があり自分たちのストーリーもある。小学校でも子供たちの思いをもっと叶えてあげたいと思った。
 - ・友達とのいざこざの場面で、友達にされていやだったことを保育者に訴えていたが、保育者が「どうしたいのか」を子どもに投げかけ気持ちを引き出し、それを相手に伝えてみるようアドバイスしていた。子どもの気持ちを丁寧に聞き取る様子が印象的だった。
- 7 成果（○）と課題（▼）
 - 小学校の先生方に保育中の子供たちの姿をデジカメで撮影していただき、具体的な姿を基に話し合うことができた。特に、就学を控えた5歳児を中心に、どのような願いをもって保育をしているか、今現在どのような育ちがみられるのかを小学校の先生にお伝えすることで、幼小の教師間で子どもの見とり方をすり合わせできるよい機会であった。
 - ▼協議時間が限られているため話し合いを深めるのが非常に難しい。このような機会を重ね、さらに特色ある附属ならではの幼小連携を進め発信していきたい。

【幼小連携：幼小連絡会】

幼小連携 フェスティバル参観・給食交流会・交流学習について

1 ねらい

幼稚園

小学校を訪問し1年生との交流を通して、入学後の小学校生活や学習に対して期待をもつ。

小学校

附幼との交流を通して、小1プロブレムなどの問題に対応したカリキュラムづくり及び子どもの情報の共有などを図りながら、子どものよりよい育ちのために関係強化を行う。

2 日時・場所

(1) はなうめフェスティバル参観 12月13日（金）→参観中止 附属小学校

(2) 交流活動、給食交流会 1月21日（火） 附属小学校

(3) 学習参観、交流活動 2月12日（水）→21日（金）に延期 附属小学校

3 参加者 年長児さくら組 33名

4 活動内容

(1) はなうめフェスティバル参観

1年生はなうめ学年の児童は、自分で作り上げた劇「十二支のはじまり」を附属幼稚園さくら組の園児にも見てもらおうと、ビデオレターを作成し、12月13日に行われるはなうめフェスティバルに招待した。しかし、残念ながらインフルエンザの流行により当日のフェスティバル参観は中止となってしまった。後日、はなうめフェスティバルの様子をビデオレターで附属幼稚園に送り、それを鑑賞した園児から感想の手紙が届くといった形での交流を行うことができた。

(2) 交流活動・給食交流会

1月21日には、さくら組を招待して、小学校の学習を体験したり一緒に給食を食べたりする交流を行った。学級ごとに学校探検やすごろくなどを企画し、どのように交流するか、ねらいや内容を計画して臨んだ。例えば3組では、「さくら組のみなさんに明るく、楽しく過ごして欲しい」という思いをもって活動し、学校のことを教えるために、学校探検を企画し校長室に入っていいか依頼に行って確かめたり、安全かどうか確認するために下見に行ったりするなど、グループごとに念入りに準備を行った。当日は、「優しく教えてあげることができた。」と、嬉しそうに振り返りを話す姿が見られた。一方で、「○○くんが走ってしまった。」「教えてあげればよかった。」と上級生としての自分の振る舞いを反省する姿もあり、上級生としての意識の高まりを感じられた。

また、給食交流でも、給食の準備や片付けを進んで教えたり気を利かせて手伝ったりする姿が見られ、園児にとって小学校の学校生活を見通す体験となり、小学生にとっては、自らの成長への気づきをもち、自分に自信をもつきっかけとなる体験として、今回の交流活動を行うことができた。

＜はじめのことば＞

さくら組のみなさん、ようこそ附属小学校へ。わたしたちは、さくら組のみなさんがくるのをずっと楽しみにしていました。待っている間にさくら組のみなさんがどんな気持ちでくるのか、どうやるとニコニコになるのか、作戦を立てました。考えてみると、ニコニコになって欲しい、困っていたら助けてあげたい、思いやりのあることをやりたいと思いました。今日は、思いっきり楽しんでください。よろしくお願ひします！



(3) 学習参観・交流活動

2月12日に交流活動を計画していたが、小学校でインフルエンザが流行したため、2月21日に延期となった。今回の交流では実際の小学校の授業の様子を参観し、小学校での学習に期待をもつことができるようになるとともに、来年度なかよしペアの1年生、2年生としてかかわりをふかめるきっかけとなることをねらっている。

5 成果（○）と課題（▼）

幼稚園

○年長児は、1年生のフェスティバル鑑賞が実現しなかったため、初めての交流となる給食交流会を非常に楽しみにしていた。給食の前に行われた校内探検では、1年生があらかじめ準備してくれた様々な「紹介したいところ」がリストアップされているなか、年長児の思いに沿って「どこに行きたい？」と年長児に選択させ希望を叶えてくれるという配慮が大変うれしかったようだ。

○年長児を迎えるにあたって1年生が年長児の気持ちに寄り添い、大変優しく丁寧に学校内を案内してくれた。どこかに感じている小学校生活への不安が和らぎ、小学校生活や小学生に対する憧れが高まり「また、小学校に行ってみたい」という前向きな言葉が多く聞こえてきた。

小学校

○フェスティバルを見ての感想が届き、子どもたちはとても喜んでいた。子どもたちの達成感がさらに大きくなかった。

○交流活動の際は、手をつないだり、年長児の気持ちを聞いたりしながら活動する姿が見られた。普段は、一番年下という立場にいる1年生だが、少しお兄さん、お姉さんになった気分を味わうことができた。上級生の立場になることで、相手のことを思いやって行動しようとする気持ちが高まり、一緒に楽しく交流を深めることができた。

▼インフルエンザの流行による延期や中止が例年起きている。当日は交流できないときも間接的に交流する工夫を行っているので、そのバリエーションを増やしていきたい。

【幼中連携：幼稚園運動会】

中学生による幼稚園運動会手伝い

1 ねらい

幼稚園：中学生のお兄さんお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。

中学校：幼稚園運動会のボランティアを通して、幼児との関わりを学び主体的に運営を手伝う。

2 日時 令和元年9月14日（土）8:30～12:00

3 場所 山形大学附属幼稚園

4 参加者 ボランティア希望の3年生13名 2年生4名 計17名
音楽主任 渋谷教諭

5 内容 • ファンファーレ演奏 • 園児誘導、世話 • 競技の試技、補助
• 道具等の準備、片付け

幼稚園のボランティアに参加する前の私は、園児たちは初めて見る私を怖がり距離があいてしまうのではないかと不安でした。しかし、園児たちは私にたくさん話しかけてくれて、特に嬉しかったのは、「先生」と呼び頼ってくれたことです。その時、園児たちからは、先生のように見えていたのだと思い、より先生たちのように優しく接しなければいけないと思いました。周りに目を配り、気づいたことを積極的にサポートすることができてよかったです。 三年 金澤 杏佳

小さな子供たちが懸命に走る姿や笑顔を見て、心があたたかくなりました。運動会終了後、PTAの方々や先生方と協力して片づけをして、グラウンドに何もなくなったのを見たとき、疲れがどっと出ましたが、それを上回る充実感でいっぱいになりました。この充実感が、ボランティアの魅力なんだと感じました。今後も様々なボランティアに参加してみたいです。 三年 村田 明穂

今回の幼稚園ボランティアでは、小さい子供への接し方を学び、自分の経験値を上げることができました。小さい子供の目線に自分から合わせに行ったり、水を飲みたいか、トイレに行きたくないかななど常に聞いたりして、園児によりそって活動ができたのではないかと思います。日常ではあまりないことを経験できて楽しかったです。 三年 吉岡 元



6 成果（○）と課題（▼）

○園児は、中学校の運動会を応援しに行ったことや家庭科交流で一緒に遊んでもらった体験から、中学生に対して大変親しみを感じており、トイレの世話や困りごとを聞いてもらうなど非常に打ち解けて交流する姿が見られた。

○中学生が競技運営に積極的に参加し俊敏に働く様子や園児に対して優しく丁寧に接する姿は、幼稚園の保護者にとっても子どもの育ちの見通しとなり附属学校園としての連携を感じるよい機会となった。

園児と中学生の交流学習

1 ねらい

(中学校)

- ・幼児との遊びや会話などを通して幼児に親しみを持つことができる。
- ・幼児と楽しく交流する方法を工夫し、ふれあいの楽しさを味わうことができる。
- ・幼児との会話や遊びから、幼児の興味・関心の傾向をつかむことができる。

2 日 時 令和元年6月24日（月）10：00～10：30 <3年1組>

11：00～11：30 <3年2組>

6月26日（水）10：00～10：30 <3年3組>

11：00～11：30 <3年4組>

3 場 所 山形大学附属幼稚園



4 参加者 附属中学校 第3学年 133名

5 内 容

(1) 幼稚園の4クラス（年長1，年中1，年少2）に
男女8～9人ずつ分かれて入り、園児と交流した。

(2) 遊び

- ① 園庭：サッカー、鬼ごっこ、かけっこ、砂遊び、水遊び、遊具遊び、花摘み
- ② 室内：工作、ままごと、ごっこ遊び、色水遊び、縄跳び、絵本の読み聞かせ

(3) 事前学習

- ① 既習事項（幼児の体と心の発達、ことばの使い方、人との関わり）を生かし、
自分なりに工夫しながら幼児と交流するための方法を考えた。

- ② 幼児と交流する際の注意点を確認した。

(4) フェルトのボール製作

- ① 交流後、お礼として、手縫いで製作したボール
とボール遊びを考案し、作成した冊子を幼稚園に
プレゼントした。



6 成果（○）と課題（▼）

○幼児と実際にふれ合うことを体験することで、学習し

た内容について理解を深めることができた。さらに、幼児に対して新たな発見もあり大変貴重な体験となった。

生徒感想より「幼児は常に色々な事を考えながら遊んでいるとわかった。」「園児が遊びをさらに楽しくしようとする姿は、中学生の思考力にもつながると思った。」

○交流後、幼児に対してさらに興味・関心を持ち、学んだことをふり返りながら学習を進めることができた。幼児のおもちゃ製作の場面でも交流した園児を思い出しながら製作する姿が見られた。

○交流後、幼稚園の先生方から生徒の様子を具体的にお聞きすることができ、その後の指導に役立てることができた。

▼今年度も1度きりの交流学習であったため、来年度はできるだけ回数を増やし、幼児との交流を深めていきたい。そのためにも日程調整を早めに行い、計画的に進めていきたい。

【小中連携：合唱交流】

小中合唱交流会

1 ねらい

附属小学校

来年ともに生活する先輩との出会いを通して、今の自分を見つめ、新しい生活への意識を高めることができる。

附属中学校

来年ともに生活する後輩に、歌を通してメッセージを送ることで、よりよい附中をつくっていこうという意識を高める。

2 日時

令和元年 11月 12日（火）

3 場所

山形大学附属中学校体育館

4 参加者

附属小学校 6年生 39名 附属中学校 2年生 135名

5 合唱交流会の次第

進行 附中生徒 高嶋 風花

1. 開会のことば（今田 康聖）

2. 中学校 合唱コンクール優秀クラスの発表「青葉の歌」
指揮（窪田 真聰） 伴奏（川原 陽香）

3. 中学生の合唱発表「信じる」
指揮（上野 理生） 伴奏（川原 陽香）

4. ともに歌おう 「翼をください」
指揮（橘 律貴） 伴奏（小山 遙花）

5. 感想発表（寺島 俊樹、鈴木 悠大、山川 文乃）

6. 閉会のことば（阿部 夏子）

6 成果（○）と課題（▼）

小学校

○児童は、小学生の自分たちにはまだ出すことのできない豊かな響きのある歌声を生で聴かせてもらったことで、中学生の歌声へのあこがれの気持ちが高まった。特に、男児の多くは、「男声パートが、迫力があってかっこよかった。自分もあんな声で歌えるようになるのが楽しみだ」のように、男子生徒の歌声について興味を持って振り返っていた。変声期を迎えようとしている男児にとって、男子生徒が力一杯歌う姿を見たことは、将来の自分への楽しみな気持ちが膨らむことにつながったようだ。また、児童は、中学生のみなさんと一緒に『翼をください』を合唱したときのことを「途中から、中学生の歌声がどわあっときて、自分たちの歌声を包んでくれた感じになった。主旋律とは違うメロディがいろいろ聞こえてきて、そんな中で自分が主旋律を歌っていることもわかって、気持ちがよかったです。声は小学生と中学生で全然違うけれど、一緒に歌えるのがいいなと思った」と振り返った。中学生と一緒に一つの曲を合唱する経験も、児童にとって、中学生へのあこがれの気持ちをより強くしたり、「自分の歌声があこがれの歌声と共にあります」という感覚をもったりすることになり、価値のある活動だった。



中学校

○生徒たちは、自分たちが熱心に取り組んできた合唱を後輩に聴かせるために、頑張っている姿があった。中学生としての姿、中学生の歌声はこのような響きになるんだということを小学生に感じ取ってもらいたいという思いが感じられた。また、中学校の体育館を会場にして実施したことで、小学生に中学校生活の場の一部を体験してもらうことができたと考えている。

▼もう少し内容を充実させたいと思うが、毎年準備時間がほとんどないのが悩みである。今年も合唱コンクール直後の日程であり、会を運営する学年代議員会への打ち合わせも不十分なまま当日の昼休みにしかリハーサルができなかつた。そのため、会を進行しながら教師が生徒に指示をしなければならない場面があり、もう少し生徒たちだけで進められるのだという姿を小学生に見せたかった。また、生徒の中には、小学生の歌も聴きたかったという意見があった。



【幼特連携：交流及び共同学習】

幼稚園と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

幼稚園

特別支援学校の友達や先生と一緒に遊び、親しみをもつようになる。

小学部

幼稚園の友達や先生と同じ場で遊ぶことを通して、友達と一緒に遊ぶことや遊びの持つ楽しさ、面白さに気付く。

2 参加者

附属幼稚園園児 年少児31名、年中33児名、年長児33名

(第3回は、年少児のみ実施)

附属特別支援学校 小学部1組児童 6名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第1回	6月28日(金) 10:00～11:10	附属幼稚園	・幼稚園の園庭の滑り台などの遊具や砂場、小川等、好きな遊びを見付けて遊んだり、園庭に設置したプールで一緒に水遊びをしたりしながら交流した。
	7月1日(月) 10:00～11:10		
	7月2日(火) 10:00～11:10		
	11月11日(月) 10:00～11:10		・幼稚園の園庭の滑り台などの遊具や砂場、小川等で一緒に自由遊びを行った。雨の日は、遊戯室で巧技台渡りやリレー等をして一緒に体を動かしたり、保育室でごっこ遊びや工作をしたりしながら交流した。
	11月12日(火) 10:00～11:10		
第2回	11月13日(水) 10:00～11:10		
	11月、12月中の 2週間程度	附属幼稚園 ・ 附属特別 支援学校	・園児、児童のお互いの作品を交換、展示し、鑑賞し合うことで交流を深めた。
	1月28日(火) 10:55～11:45	附属特別 支援学校	・特別支援学校の体育館やプレイルームで、羽根付きや凧揚げ、福笑い、かるた、だるま落としなどのお正月の遊びを行なながら交流した。
事前 事後 の 学習	＜幼稚園＞ ・第1回、第2回の交流の事前学習では、小学部の児童が来園することや活動内容について確認した。第3回の交流では、特別支援学校の遊び場の様子を写真で見たり、凧揚げで使う凧を自分で作ったりしながら交流することを楽しみにした。 ・第3回の交流の事後学習では、楽しかった活動を振り返りながら、小学部の友達に向けて手紙を書いた。		
	＜小学部＞ ・第1回、第2回の交流の事前学習では、幼稚園の園庭で園児たちが遊ぶ様子を写真で見ながら、遊び場や活動の流れを確認した。第3回の交流の事前学習では、幼稚園の友達に遊び場を紹介するための練習を行ったり、遊び道具の準備を行ったりした。 ・事後学習では、毎回交流時の写真を元に遊びの様子を振り返った。第3回の交流の事後学習では、楽しかった活動を振り返りながら、幼稚園の友達に向けて手紙を書いた。		

4 成果 (○) と課題 (▼)

幼稚園

- 夏の交流では、幼稚園の水遊びの時期と重なったため、特別支援学校の友達と水遊びを楽しんだ。広い園庭での遊びに比べるとプール付近とプール内に活動場所が限られたため、子ども同士の距離感が縮まったように感じられた。道具を貸し借りする関わり合いはもちろんのこと、友達の遊びの様子をじっと見つめ動きを真似るなど互いを感じながら楽しんでいる姿が伺えた。
- 秋の交流では、園児たちの中に自然と特別支援学校の友達も加わって遊ぶ姿がたくさん見られた。園児達は支援学校から来た友達に自分たちの園のことを伝えたいと、道具や場所の使い方を「こうするんだよ。」と言葉や身振りで表そうとしていた。
- 昨年実施できなかった冬の交流が実施できた。特別支援コーディネータの協力により、特別支援学校内の写真を活用しての事前指導を行うことができ、園児達は期待感をもって交流に臨むことができた。小学部の友達がしている冬遊びと一緒に体験させてもらうことで、身近に友達を感じて友達の名前を知りたがったり、同じ遊びをやりたがったり、支援学校の友達を意識した言動が見られるようになった。
- 交流後、子供たちと交流を振り返りながら、特別支援学校の友達に写真と手紙でお礼の気持ちを伝えることができた。交流会の中でも、共に歌ったり踊ったりする活動でより親近感をもつことにつながると考えられる。
- ▼昨年度より、遊びの交流の他に互いの作品を展示し合う交流を行っている。来年度は、幼稚園で取り組んでいる食育を通して、特別支援学校の子供たちと交流を深められる活動を検討していきたい。

小学部

- 幼稚園の園庭では、滑り台等の遊具遊びの他に、小川や築山での水や石、木の葉など自然の中の素材を自分から見付けて遊びに向かう児童の姿が見られた。また、室内では、幼稚園児が行うお化け屋敷ごっこや木の実等の素材を使った遊びをまねて遊ぶ児童もいた。児童からは、「学校でもやってみたい。」という声も聞かれ、遊びの面白さに気付き進んで遊ぼうとする姿が見られるようになった。
- 交流を継続するに従って、児童が園児と簡単な言葉を交わしたり、道具等を貸し借りしたりしながら関わって遊ぶようになった。児童から園児に直接言葉を掛けることは少なかつたが、教師が間に入ることで、集団で遊ぶ園児の中に入って触れ合いながら遊んだり、同じ友達と同じ場でやりとりしながら遊びを楽しんだりすることができた。また、第3回の本校での交流では、遊びに入る前に児童たちが行った学習活動であるお正月の遊びを児童自身が紹介する時間を取りました。そうすることで、児童が園児に対して、お勧めの遊びなどを直接言葉で伝える機会とることができた。
- ▼第3回の本校での交流では、園児に対してより児童のことを知ってもらうために、自己紹介をする場を設けたり、本校に園児を招く際に招待状を渡したりする等の活動を仕組むことで、児童同士の関心が更に高まることが考えられる。また、自由遊びを中心してきたが、簡単に行えるゲームや集団遊び、ダンスなど、児童と園児双方の興味関心に基づいた全員で取り組める活動を意図的に設定することで、よりかかわり合いながら活動できることも期待できる。今後は、自由遊びの良さと設定遊びの良さ、両面を考えながら、よりよい交流に向けて活動内容を検討し計画していきたい。



【小特連携：交流及び共同学習】

小学校と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

小学校

特別支援学校の友達と一緒に活動することを通して、他者とよりよい関係を築こうとする姿勢を育む。

特別支援学校小学部

小学校の友達と様々な活動に取り組みながら、気持ちや考えを伝え合い一緒に活動する楽しさを知る。

2 参加者

附属小学校 複式学級3、4年児童 12名

附属特別支援学校 小学部1～6年児童 18名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第1回	5月16日（木） 10：30 ～11：30	附属特別 支援学校	「ともだちをしろう①」 ・ペアの友達との顔合わせを行った。特別支援学校の児童が学習の中で行ったフライングディスクやボッチャ、吊り下げ遊具、ボールプール等で自由遊びを行った。
第2回	7月 4日（木） 10：30 ～11：30	附属特別 支援学校	「ともだちをしろう②」 ・特別支援学校の児童が学習の中で制作したボウリングで遊んだり、バスケットボール、三輪車等で自由遊びを行ったりした。
第3回	9月26日（木） 10：30 ～11：30	附属特別 支援学校	「ともだちとなかよくなろう①」 ・小学校の児童が準備した手作りの遊び道具やゲームで遊んだ後、ボールプールでやフライングディスク、三輪車等で自由遊びを行った。
第4回	11月21日（木） 10：30 ～13：50	附属特別 支援学校	「ともだちとなかよくなろう②」 ・小学校の児童が準備した手作りの遊び道具やゲームで遊んだ後、ストラックアウトやフライングディスク、三輪車等で自由遊びを行った。 給食と一緒に食べながら、交流を深めた。
第5回	1月23日（木） 10：30 ～13：50	附属特別 支援学校	「ともだちとなかよくなろう③」 ・小学校の児童が準備した手作り玩具やゲームで遊んだ後、特別支援学校の児童が学習の中で行ったお正月の遊び(羽根付きや凧揚げ等)で遊んだ。 ・小学校児童がお別れの会を企画し、交流の思い出を発表したり全員でダンスをしたりした。
事前 事後の 学習	<小学校> ・事前学習として、昨年度作ったペアの好きなことや仲よくなるこつを書いた「ペアブック」を読む時間を設けた。また、3年生が4年生や昨年度複組だった5年生にペアの情報を聞くことで、活動への期待感と見通しをもつことができるようとした。 ・交流活動を通して学んだことを、フェスティバルで保護者に向けて発表した。 <特別支援学校小学部> ・事前学習では、学級ごとに小学校のペアの友達や前回の活動の様子の写真を見ながら、活動の流れを確認したり、次回の交流への期待感を高めたりした。 ・事後学習では、毎回学級ごとに交流の様子を写真で振り返り、楽しかったことなどの思いをペアの児童に向けた手紙に表した。		

4 成果 (○) と課題 (▼)

小学校

- 3年生にとっては初めての体験となるため、なかなか先が見通せないこともあったが、昨年度の様子を楽しそうに話す4年生の姿を見て、期待感をもって交流活動を始められた。「附小企画」に向けての話し合いや準備をする中で、4年生が3年生に対して、昨年度の経験をふまえながら適宜アドバイスをしていた。昨年度、交流活動を経験している4年生の存在は、3年生にとって頼りになる存在であると同時に、安心感を与える存在となっていたと捉えている。
- 始めは、「してあげる」という思いが強かった子供たちだが、「心のバリアフリー」について学習したことでの自分達の中にも「心のバリア」があることを自覚した。これをきっかけに、「一緒に」「心を寄せる」という意識が生まれ、自分のかかわり方を見直すと共に、「友達」としての行動が増えた。

親友みたいに仲よくなったり、きょ年のペアのYさんと、今日もうかで会いました。その時、Yさんからぼくの名前を言ってくれて、本当にうれしかったです。今のペアじゃないのに、ぼくのことをはっきりおぼえていてくれて、これが本当の友じょうだなと思いました。
(4年A児)

反省は、私の好きな遊びをもっと選べばよかったということです。Rさんのしたい遊びをするのは楽しかったけど、私の好きな遊びをすることで、Rさんにもっと私のことが分かってもらえると思いました。(中略)ありがとうございました。会で、終わりの言葉を言い終わった時に、Wさんがあくしゅをしてくれました。普段、あまりしたことがなかった私にとって、そのあくしゅは、とても心に残りました。
(4年B児)

上の2つは、子供たちが書いた第5回交流の振り返りの一部である。これらから、子供たちは、自分とペア、どちらか一方通行ではなく、お互いに相手の存在を尊重し合う関係でいることが大切だと感じていると伺える。これは、1年、もしくは2年間の交流活動における、たくさんのかかわりを通して得られたものだと考えている。

- ▼ 子どもの思いを高めたり、準備したりする時間を十分に確保することを大切にしたいと思っていたが、交流活動と本校の学校・学年行事へ取り組む時期が重なると、交流活動のための時間をなかなか確保できなかった。見通しをもって、指導計画を立てるべきだった。

特別支援学校小学部

- 自由遊びでは、本校児童が遊び慣れた遊具や、学習の中で行ったり製作したりした遊び場を設定した。そうすることによって、本校児童がスムーズに遊びに入ったり、自分たちの遊び場や遊び方を小学校児童に紹介したりと主体的に活動することができた。また、第3回交流から実施した小学校の児童が企画する活動は、どの学級の活動も本校児童の興味関心を取り入れた遊びになっていた。分かりやすい遊び方や扱いやすさを考えた遊び道具の工夫もされており、小学校の児童たちの思いが感じられた。本校児童も夢中になって遊ぶことができた。
- 回を重ねるごとに、初対面であった児童同士も名前を覚えて呼び合ったり、自然に手をつないで移動したりするようになった。自由遊びの場面では、遊び場の絵カードを活用しながら、児童同士がお互いにやりたいことを伝え合ったり、相談したりする姿も見られた。また、第4回、第5回の交流では、自分の作ったものをペアの児童に見せて自分を積極的に表現したり、別れ際には、涙ぐみながら自分の気持ちを相手に伝えたりする姿も見られ、かかわりの深まりや気持ちの繋がりが感じられた。

- ▼ 事前に本校児童が小学校児童とどんな活動をしたいか等、気持ちや考えを吸い上げながら、体育館やプレイルーム等での遊び場の企画や準備等から行うことで、より主体的にかかわりながら交流することも期待される。今後も、双方の児童にとって主体的・対話的で深い学びとなるように、交流及び共同学習を計画、実施していきたい。



附属中学校と附属特別支援学校中学部の交流及び共同学習

1 ねらい

- (1) 附属中学校の生徒と一緒に活動することや活動内容が分かる。
- (2) 附属中学校の生徒と音楽の授業を通して、歌声の美しさや豊かな響きを感じ、それを表情や身体などで表現しながら活動する。
- (3) 同年代の友達と一緒に活動する楽しさを感じながら、相手に关心を持ったり自分からかわろうしたりする。

2 日 時

令和元年11月25日（月） 13:30～14:20
令和元年12月10日（火） 10:50～11:40

3 場 所

山形大学附属中学校 六稲ホール

4 参加者

附属特別支援学校中学部 附属中学校1年3組、1年4組

5 活動内容「世界の音楽に親しもう、一緒に歌おう」

今年度も附属中学校で交流および共同学習を2回（1回目は1年3組、2回目は1年4組）行った。

始めに、全体で学校紹介を行った。特別支援学校中学部は、クラスごとに学習の様子を紹介した。附属中学校は、1年3組は「HE I WAの鐘」、1年4組は「空は今」と合唱コンクールでの歌をそれぞれ発表した。

次に、7班に分かれて、グループごとに自己紹介をした。

お互いのことが少しほんわかしたところで、次の活動に移った。

共に活動する場面では、附属特別支援学校の音楽で取り組んでいる表現や歌を中心に行つた。

「世界の音楽に親しもう」では、アフリカの「チェチェコリ」を全員で踊った。より交流が図れるように、グループを基本として、附属中学生と附属特別支援学校中学部生が交互になるように並んで二重の輪になり活動した。



その後は、「一緒に歌おう」で、全員で「てのひら」を歌った。附属中学校の教諭が指揮を行い、附属中学生が伴奏を行い、それに合わせて全員で齊唱をした。全員で同じパートを歌うことで声量が増し、ホールいっぱいにやさしい歌声が響き渡った。

最後は、お互いに楽しかったことや良いと思ったことなど感想を発表し合い、交流を終えた。

6 成果 (○) と課題 (▼)

附属中学校

○今回交流を行った1年3組、1年4組の生徒は、特別支援学校の生徒との交流は初めてであり、生徒たちにとってとても貴重な学習だったと感じている様子だった。初めは少々、接し方に戸惑った様子も見られたが、活動が進むにつれて次第に緊張も解けていったように感じられた。活動後に書いた感想では、「一つのことを一緒に活動して通じ合えた。」、「学校紹介で、授業や掃除の様子を一生懸命伝えようとしている姿があり、元気をもらった。」、「私たちの合唱を楽しそうに聴いてくれてうれしかった。」、「全員で踊ったダンスが楽しかった。」、「最後に歌った『てのひら』は、歌っていてこのメンバーでしか作れない歌になったと感じた。」など前向きで充実感に満ちた内容であった。



○事前の準備について、1時間のみ音楽の授業で打ち合わせや歌唱の練習をしている。その後は、役割分担や挨拶の内容、会場設営など、自分たちで率先して行う姿があった。活動当日、自分の想定していたものと違い焦ってしまったり、うまく進めることができて安心したりなど、活動を事前にイメージして、それにどのように対応するか考え実行するという、貴重な経験をすることができた。



附属特別支援学校

○毎年行っている活動であり、学習してきたことを介しての交流及び共同学習のため、生徒たちは楽しみにしながら当日を迎え、見通しを持って活動できた。

○同年代の生徒たちの生の合唱を聞くことができ、印象に残ったと感想を持った生徒もいた。

○1回目の交流よりも2回目の方が、生徒たちも附属中学校の生徒と積極的にかかわることができたり、自分たちの学習発表を相手意識を持ってできたりした。

○「世界の音楽に親しもう」の曲はリズミカルな曲であり、歌詞とともにダンスも繰り返しが多いことから、お互いに向かい合う、手をつないで輪になる、列を作るなどかかわりながら笑顔で踊りを楽しむ姿が見られた。

○相手を理解することや同年代の友達とかかわること、見通しが持ちやすい活動であること、また2回の交流を通してより楽しく活動できたことなどを考慮すると良い点が多く、今後も継続して続け、深めていくことが望ましいと考えている。

▼ねらいの(3)とかかわって、自分からかかわろうとするといった交流を深める観点からすると、同じクラスと2回交流できないだろうかといった意見もあり、今後も相談しながら交流及び共同学習をすすめていきたいと考える。



II 特別寄稿

■大学・学部と附属学校との共同研究■

山形大学地域教育文化学部・大学院教育実践研究科と附属学校園との共同研究について

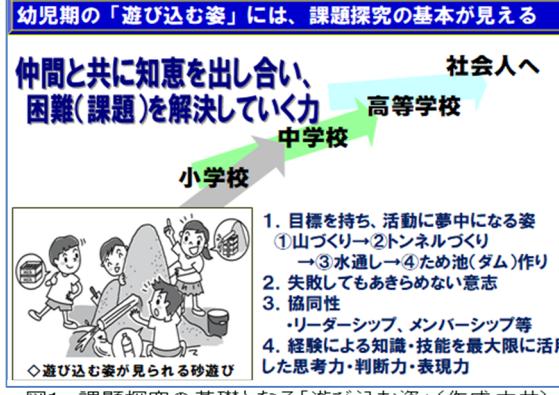
～県教委と連携した探究型学習の推進とカリキュラム・マネジメントの取組～

山形大学大学院教育実践研究科 教授
附属学校運営副部長 中井 義時

1はじめに～探究型学習のスタートは幼児期の「遊び込む」ことから～

山形大学附属学校は、山形県教育委員会の「探究型学習推進プロジェクト事業」推進協力校になっており、大学と連携しながら先進的且つ、地域の学校のモデルとなる探究型学習の研究に取り組んでいる。

探究型学習の原点を、目の前の課題に夢中になって取り組む、まさに「遊び込む」姿にこそ見ることができると考え、幼小中連続した学びの在り方と目標具現化のカリキュラムを開発しながら研究を進めている。



2すべての教育活動の基盤となる学校経営グランドデザイン

山形大学附属学校園では、山形大学の教育経営担当の教授等の助言を受けながら、通常の教育活動から教員の養成・研修、先進的な研究活動を含め、各校園長が「学校経営のグランドデザイン」を作成し、目標具現化に努めている。このグランドデザインは附属学校園の経営の基本となるものであり、研究もここからスタートする。学長はじめ執行部役員にプレゼンテーションを実施し、協議しながら進めている。下図は附属幼稚園のものである。(概要を中心に詳細等は省略)

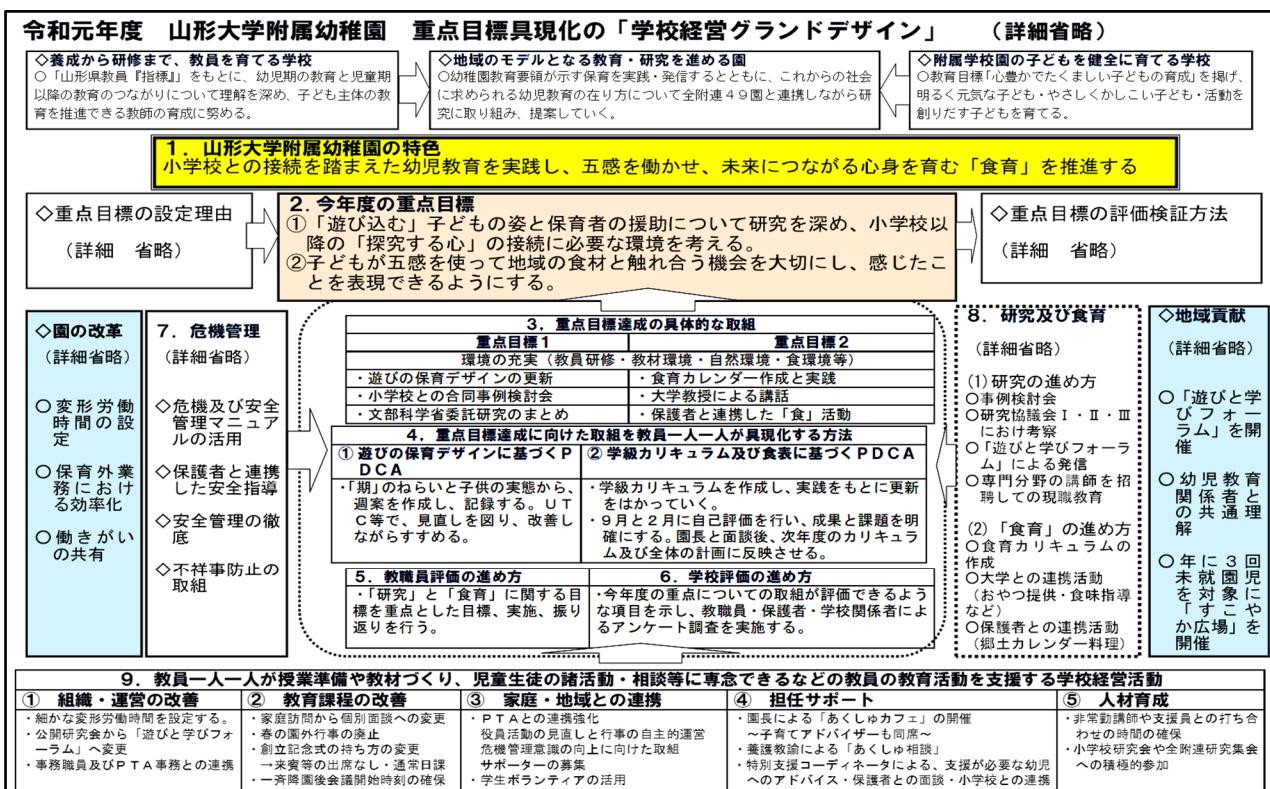


図2 令和元年度 山形大学附属幼稚園 重点目標具現化の「学校経営グランドデザイン」

3 附属幼稚園の取組：遊び込む子どもを育む保育と「遊びの保育デザイン」の作成

(1) 遊び込む子どもを育む保育

附属幼稚園では、幼児教育に精通している3名の共同研究協力者（山形大学教員）の他にも、造形や生活科、教育方法、特別支援教育に造詣の深い4名の研究者（山形大学教員）と共に、「遊び込む子どもを育む保育」を探求している。

右の写真は、興味津々に「おちゃづくりを探究する」子どもと、試行錯誤を繰り返しながら目の前の課題をクリアしていく「水道管工事ごっこ」に夢中になっている子どもの状況を表したものである。このような遊びの文脈、遊びの状況とその変化を丁寧に読み取り、事例の図式化・再考察を行いながら、保育者の援助・働きかけについての考察を進めている。研究を進めるにあたっては、「遊びの読み解き方」（主体的態度・遊び課題の生成・他者との関わり・対象との関わり）の視点を持つこと、遊びのエピソードを記録・整理している「遊然草」の活用、ユートークカフェ（UTC）と呼んでいる「保育者の語り合い」を大切にしている。



写真1 おちゃづくりの探究



写真2 水道管工事ごっこ

(2) 遊びの保育デザイン

附属幼稚園では保育のカリキュラム・マネジメントとして、3~5歳児を各Ⅲ期からⅣ期に分け「遊びの保育デザイン」を作成している。発達段階における遊びのテーマやねらい、幼児期の終わりまでに育てたい「10の力」、援助のポイントを参考に実践・評価し、改善を進めている。

遊びの保育デザイン（5歳児 Ⅳ期）

期	協力してじっくり遊びに取り組む時期（Ⅳ期）	子どもの姿	学年 学級の活動	月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3	伝承遊び 様々な人と交流する活動 幼稚園での生活や自分の成長を振り返る活動						
ねらい	△友達と協力して、新しいことに挑戦しながら遊びを広げていくようになる。 ◆友達の目的に向かって共に活動をすすめ、友達との心つながりを深めていくようになる。										
内容（幼稚園の終わりまでに育てほしい力を踏まえて）	<ul style="list-style-type: none"> 生活や活動に見通しをもち、時間を意識しながら自分で生活をすめていく。（健脚） 友達と共通の目的に向かい、お互いの思いを出し合いかねる（人間関係・言葉） 自分なりに目当てをもって取り組み、繰り返し挑戦しようとすること（人間関係） 交流を通して、身边にいるいろいろな人と触れ合い、親しみを感じる。（環境・人間関係） 自分の気持ちを調整し、友達と折り合いをつけながら、友達と共に遊びをする（環境） 冬の自然に興味や心をもち、雪や氷を利用して遊ぶ。（表現） 身近な事象などに触れる試行錯誤を繰り返す中で友達の様々な考えに触れ、考え方をもとに新しい考えに気づいてしまう。（環境・言葉） 思ったことや想像したことを言葉で表現する楽しさを味わう。（表現） 感じたことや想像したことなどを様々な方法で表現する（表現） これまでの生活経験を振り返りながら、自分達の成長を感じ、小学生になることに期待をふくらませる。（表現） 身近な人たちへ感謝の気持ちを込めて言葉で伝えたり、室内をきれいにしたりする。（表現） 	遊び	<ul style="list-style-type: none"> 友達と共通の目的に向かって、思いを出し合いかねながら遊びをすめていく。 遊びの場を行き来しながら、それぞれの遊びの場が一つの大きな遊びとしてつながっていく。 ・純素食や節分集会などの行事を通じて、年長児としてみんなが楽しめるよう考え方ながら取り組む。 								
援助のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ①友達と一緒にあえるような場の設定や環境の工夫 ②自分達ですすめていく喜びや満足感を味わえるような時間と場所の確保 ③互いの思いを出し、教え合ったり認め合ったりしながら遊びをすすめていくこととする姿への共感や見守り、後押し ④粘り強く挑戦しようとする気持ちへの励ましと、自當でもつ取り組もうとする意欲の支え ◆友達との「自分の」の意識につながる異年齢や小学生との交流や遊び取り ⑤思考を保つための共感や問い合わせの言葉掛け ⑥繰り返し試したくなる場の設定や道具・素材の準備 ⑦遊びの展開に応じた場の構成や整理 ⑧自分達で考え、問題を解決しようとする姿の見守りと価値付け ⑨見通しを共有できるようなものの作成と提示の工夫 	援助	<ul style="list-style-type: none"> 友達と一緒に、難しいと思うことにも挑戦しようとする思いがもてるように ・友達同士で声を掛け合ったり、上手にできるコツを教えてもらったりしながら遊べるよう言葉掛けをしたり、場を一緒に設定したりしていく。 ◇-①② ・不思議に思ったことや、気づいたことを共有しながら、友達と考えを出し合えるよう、共感したり見守ったりしていく。 ◆-③ ・調べたり、新しいことを知りたいとする音ひを味わえるように、絵本や図鑑などを準備する。 ◆-③ ・自分なりに結構してしようとしている姿を、認めたり励ましたりしながら、やってみようという意願を支えていく。 ◇-④ 	月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3	<table border="1"> <tr> <td>伝承遊び</td> <td>様々な人と交流する活動</td> <td>幼稚園での生活や自分の成長を振り返る活動</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	伝承遊び	様々な人と交流する活動	幼稚園での生活や自分の成長を振り返る活動			
伝承遊び	様々な人と交流する活動	幼稚園での生活や自分の成長を振り返る活動									

図3 令和元年度 山形大学附属幼稚園 「遊びの保育デザイン」（5歳児 Ⅳ期 1~3月）

4 附属小学校の取組：探究型学習の推進とカリキュラム・マネジメント

(1) 探究力の基礎を習得する

附属小学校では、子ども自身が問い合わせをもち、課題解決の過程で「学びのよさ」を実感し、「これまでの学びを生かす」ことで、探究力の基礎を習得することをめざしている。

その基礎となる課題探究力の育成については、各教科等の目標や特性に応じ、大学との連携で研究を進めている。図4は、「今の自分」から「よりよい自分」に向かう子どもの問題解決の歩みを示したものであるが、次の3つの視点を追求する中で、「子どもの問題解決力」を育てている。

- 子どもの問題解決にかかわること

視点1…子どもが「問い合わせ」をもつ

視点2…子どもが「学びのよさを実感」する

- 他教科やくらしの中でも「見方・考え方」が生きて働くようになるということにかかわること

視点3…子どもが「これまでの学び」を生かす

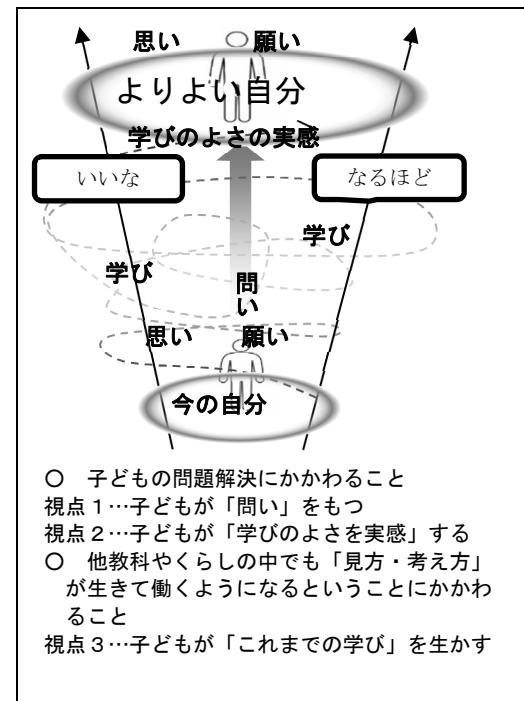


図4 探究力の基礎を育む子どもの問題解決

(2) 探究的な学びを核にした学級カリキュラムの創造と実践

右の写真は、附属小学校公開研究会（2018.6/22）におけるカリキュラム・マネジメントに関する対談の様子である。附属小学校N教諭の「学級カリキュラム」とその実践について、山形大学教員がカリキュラム・マネジメントの視点から価値付けし、その教育効果を考察した対談である。

附属小学校では、以前から教科横断的な学級カリキュラムを作成した教育実践に取り組んでおり、現在は、カリキュラム・マネジメントの視点からの見直し、改善を行っている。さらには地域の学校に普及できる「学級カリキュラム・マネジメント」の作成、進め方について、大学との共同研究に取り組んでいる。

右図4年生の年間カリキュラム・デザインのよさは、

- ① 中核に総合的な学習の時間での学習を据え、最後の総合表現活動まで探究的な学びで進めていること
 - ② 小単元ごとの探究のまとめを「新聞作成」にし、繰り返し実施し、その資質・能力の育成を国語の学習関連づけて進めていること
- と、捉えている。

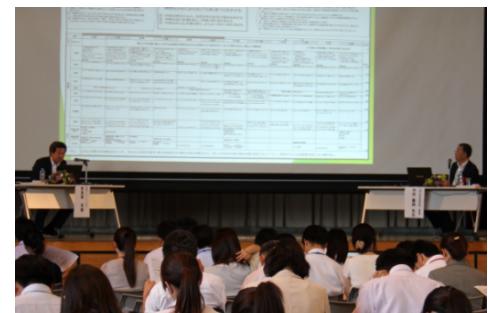


写真3 2018公開研究会での対談の様子



図5 山形大学附属小学校4年2組(2018)の学級カリキュラムの概要 (作成 中井)

5 附属中学校の取組：各教科と総合的な学習の時間における探究型学習の取組

(1) 各教科における探究型学習のモデル提示と出前授業の実施

附属中学校では、総合的な学習の時間はもとより、各教科の特性に応じ「探究型学習」に取り組んでいる。探究のプロセスである「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現（学びの振り返り）」、さらに、発展学習と各段階における学習活動をわかりやすく整理し、「探究型学習のモデル」として提示し、出前授業の要請にも応えている。



図6 第1学年 数学「比例・反比例」～ランドルト環の仕組みを調べよう～ 探究型学習の展開（2019）

(2) 大学と連携した総合的な学習の時間の探究型学習

写真4、写真5は附属中学校第3学年の生徒が総合的な学習の時間における「自己の研究課題」を探究していくにあたっての「図書館での調べ方」「まとめ方」等について、山形大学の教員から講義を受けている様子を表したものである。

附属中学校においては総合的な学習の時間における探究型学習を推進するため、平成29年度に大学所属のプロジェクト教員を附属中学校に配置し、カリキュラムの作成等に取り組んだ。平成30年度には、プロジェクト教員を中心に関元を開発・実施し、第3学年生徒がまとめた卒業論文について、大学教員から直接コメントを受ける卒業論文評価会を実施した。

附属中学校からは「探究学科」のある高等学校に多くの生徒が進学しており、中学校での学びが活かされていると言える。



写真4 図書検索方法を説明する大学教員



写真5 論文の書き方を講義する大学教員

(3) 探究型学習で育む資質・能力とカリキュラム・マネジメント

附属中学校では、大学所属のプロジェクト教員と探究型学習の研究を進めながら、表1に示している“探究型学習における50の「学び方」指導項目”を作成した。大学教員による授業や大学図書館の活用では探究活動のスキルを身につけることができた。今後は、このような学び方を高めていくために、各教科の学習のカリキュラムや指導方法の改善に取り組むことを研究推進の課題としている。

総合的な学習の時間における「探究型学習」50の「学び方」指導項目一覧

課題設定	情報収集	整理・分析	まとめ・表現
<課題を設定する> ① 大テーマから課題を絞りこむ。 ② 目的にあった発想ツールを使う。 ウエビング マンダラート オズボーン等 ③ 課題のレベルや質を吟味する。 ④ 課題設定の理由を書く。	<多様な方法で情報を集める> ⑧ 情報を集める。 (図書資料、事典・年鑑などの参考図書、地図・年表、新聞・雑誌、ファイル資料、電子メディア、人的情報源等) ⑨ 複数の情報源から正確な情報を集める。	<情報整理・分析し、評価する> ⑦ 複数の情報を比較、分類する。 ⑧ 批判的に情報を読みとる。 ⑨ 思考ツールを利用して情報を分析する。 (マトリックス、ベン図、イメージマップ、座標軸、フィッシュボーン、各種チャート等) ⑩ 目的に応じて情報を評価する。	<学習の成果をまとめる> ⑯ 目的や場に応じた方法でまとめる。 ⑰ 調べたことや事実と、自分の意見を区別する。 ⑱ 課題解決までの経過を記録する。 ⑲ 資料リストを作成する。 ⑳ P Cの文書作成ソフトで文章を入力する。 ㉑ ソフトウェアを利用して、表やグラフ、画像の入った文書を作成する。 ㉒ プrezensoftを用いてスライドを作成する。 ㉓ コンピュータ周辺機器の機能や特徴を理解して活用する。 ㉔ 引用する場合は「」を付けて出典を明らかにする。
<学習計画を立てる> ⑤ 調べる方法を選ぶ 読む 聞く 実験 体験する ⑥ まとめの方法を選ぶ。 ⑦ 学習の見通しをもつ。	<図書館を利用する> ⑩ 学校図書館を利用する。 ⑪ 公共図書館を利用する。 ⑫ N DCを理解して図書を探す。 ⑬ コンピュータ目録で検索する。 ⑭ レファレンスサービスを利用する。 ⑮ 閉架図書や禁帶出資料を利用する。	<情報適切に取り扱う> ⑯ 情報の取り扱い方を知る。 (インターネット情報、著作権、情報モラル、個人情報の保護等) ⑰ 情報の安全性や信憑性を適切に判断する。	<学習の成果を発表する> ㉔ 目的や場に応じた発表の方法で発表する。 (口頭、展示・掲示、レポート、ポスター、実演、タブレット、電子黒板、コンピュータ等) ㉕ わかりやすく伝えるための工夫をする。 (内容の構成・展開、色づかい、図表・グラフ・写真、姿勢、発声、視線等) ㉖ 情報発信による社会への影響を考え、責任をもって行動する。
<各種施設を利用する> ⑯ 目的に応じて各種施設を利用する。 (博物館、資料館、美術館、行政機関、見学施設、体験施設等)	<目的に応じて話し合いや交流をする> ㉗ 共感的に傾聴する。 ㉘ 注意深く、正確に聞き取る。 ㉙ 質問や感想を述べる。 ㉚ コメントやアドバイスをする。 ㉛ 多様な方法で話し合いや交流をする。 (対談、鼎談、バズセッション、ディベート、パネルディスカッション等。ペア、4人G、班、学級、学年での話し合い、情報交換、打ち合わせ、協議、会議等)	<学習の過程と結果を評価する> ㉛ 課題設定や学習計画を評価する。 ㉜ 成果や過程を基に、改善の方法を考える。 ㉝ 発表内容や方法を評価する。 ㉞ 課題の解決内容を評価し、さらなる課題につなげる。	<学習の過程と結果を評価する> ㉛ 課題設定や学習計画を評価する。 ㉜ 成果や過程を基に、改善の方法を考える。 ㉝ 発表内容や方法を評価する。 ㉞ 課題の解決内容を評価し、さらなる課題につなげる。
<情報を記録する> ㉟ ノートやカード・シートに記録する。 ㉟ タブレット等で写真や動画を記録する。 ㉟ 出典・情報源を記録する。 (著者、書名、出版社、発行年、発信者、URL、検索日) ㉟ 引用と要約を区別して記録する。	<目的に応じて話し合いや交流をする> ㉗ 共感的に傾聴する。 ㉘ 注意深く、正確に聞き取る。 ㉙ 質問や感想を述べる。 ㉚ コメントやアドバイスをする。 ㉛ 多様な方法で話し合いや交流をする。 (対談、鼎談、バズセッション、ディベート、パネルディスカッション等。ペア、4人G、班、学級、学年での話し合い、情報交換、打ち合わせ、協議、会議等)		

表1 総合的な学習の時間における「探究型学習」50の「学び方」指導項目一覧

*この一覧は「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」(2018年全国学校図書館研究大会)と「情報活用能力観点別到達目標一覧」(みやぎの情報活用育成サイト 宮城県総合教育センター)を参考に、山形県が推進する「探究型学習」のプロセスに応じて作成したものを一部要約してまとめたものです。

6 附属特別支援学校の取組

～特別支援学校における探究型学習（主体的・対話的で深い学び）とカリキュラム・マネジメント～

(1) 授業改善からカリキュラム・マネジメントへ

写真6は、2019年度特別支援学校「授業づくり研修会」において、授業公開した各教室の前に掲示された授業の見どころである。ポイントは「授業改善の“before” & “after”」である。

附属特別支援学校では、主体的・対話的で深い学びを踏まえた授業改善についても、これまでの授業とどのように変わったのかを明確にした「授業改善の“before” & “after”」を研究の成果として発表した(2018)。これは、山形大学の共同研究者とともに考え、実践したものであり、授業改善の比較は、教育課程全体(授業計画・指導内容・指導方法・学習評価)や個別の指導計画も見直す結果となった。今後も、カリキュラム・マネジメントの視点に基づいて授業改善に取り組んでいきたいと考えている。



写真6 授業づくり研修会で教室に掲示された授業の見どころ

(2) 幼児教育にも通じる「遊び」、「生活」を基本にした小学部1組（低学年）のカリキュラム

下記の表2、表3、写真7、写真8は、小学部1組（低学年）のカリキュラムの一部及び実践の状況を示したものである。小学部1組におけるカリキュラム編成のポイントは、特別支援学校新学習指導要領(2017)を踏まえ、「遊び」と「生活そのもの」を中心置いている点である。さらに、2018年度から各教科等を合わせた指導においても教科等の関連をより意識するため、表2のような教務主任が考案した様式でカリキュラムを作成している。表3は、遊びの指導「だんぼおるのまちであそぼう」に関わる教科等の関連を整理した表である。

月	実際の指導の形態						教科別の内容															
	自立活動	日常生活の指導	生活単元学習	遊びの指導	国語・算数	体育	特別活動	生活			国語		算数		音楽		保健		体育			
								基安	日	週	人	授	手	金	社	生	A	B	C	D	E	F
4																						
5	※定期的目標	・登校（挨拶、靴の履き替え、下駄箱の位置、自分の教室）	「おでとう会」・自己紹介、歌など 「そでとう」・音楽、栽培	「フレイルームであそぼう」・トランポリン、ボールプール等	「よろしくね」・自己紹介、先生や友達の紹介、教科の紹介 「ゲームの会をしよう」オリパラ等、ボッチャ、ストラックアウト	「ゲームをしよう」・西庭沢公園での遊び 「かけよう」・校外学習(けんきゅう)	「さがそうくろう」・物の名前、部位、聲音等、言葉の対応	「ふれあいタイム」・ボンチオ体験	日	日	週	特	日	日	国	国	算	生	体	体	特	体
6		・朝の活動（自分が座る、運送機の提出、靴の片付け、着替え、ロッカーノーの位置）	「だんぼおるのまちであそぼう」	「こうえんであそぼう」・西庭沢公園での遊び	「すなばであそぼう」・遊び	「さがそうくろう」・物の名前、部位、聲音等、言葉の対応	「ボールあそび」・体操・持久走・ボール運動・ダンス	「附小との交流及び共同学習」・遊び、手紙作成	日	生	週	特	日	日	生	生	生	生	生	生	生	生
7		・朝の会、帰りの会（挨拶、健診結果、今日の日付、今	「だんぼおるのまちであそぼう」	「みずあそびをしよう」オリパラ夏・水浴び、浴る、校外学習（荒天時、絵の具遊び）	「ほるらんどであそぼう」	「さがそうくろう」・物の名前、部位、聲音等、言葉の対応	「サーキット」・体操・器械運動・ダンス	「附小との交流及び共同学習」・遊び、手紙作成	日	生	週	特	日	日	生	生	算	過	体	体	体	日
8																						
9																						

表2 附属特別支援学校小学部1組（低学年）前期カリキュラム表（2019）

生活	【日課・予定】（1段階） ・身の回りの簡単な日課に気付き、教師と一緒に日課に沿って行動しようすること。
	【遊び】（1段階） ・身の回りの遊びに気づき、教師や友達と同じ場で遊ぼうとすること。 ・身の回りの遊びや遊び方について関心をもつこと。 【人ととのかかわり】（1段階） ・身の回りの人との関わり方に関心をもつこと
国語	【聞く・話す】（1段階） ・身近な人からの話し掛けに注目したり、応じて答えたりすること。 ・伝えたいことを思い浮かべ、身振りや音声などで表すこと。
	【数量の基礎】（1段階） ・身の回りのものに気づき、対応させたり、組み合わせたりすることなどについての技能を身に付けるようにする。
算数	【表現】（1段階） ・材料から、表したいことを思いつくこと。
	【心理的な安定】 ・情緒の安定に関すること。 【人間関係の形成】 ・他者との関わりの基礎に関する事。 【身体の動き】 ・身体の移動機能に関する事。 【コミュニケーション】 ・コミュニケーションの基礎的能力に関する事。
自立活動	

表3 小学部1組（低）遊びの指導「だんぼおるのまちであそぼう」に関する教科等横断的カリキュラム表



写真7 段ボールを探す子ども



前時までの遊び場を参考にして、パートナーに必要な料理を考え、一生懸命準備をする姿が見られた。

写真8 遊びに夢中

7 おわりに

地方の附属学校園に求められる使命は、未来を見据えたわかりやすい先進的な研究と同時に、地域の実態や特色を踏まえ、県教育委員会と連携しながら「地域に貢献できる研究・教育活動」を創造し、普及することであると考えている。教育の成否は直接子どもの指導にあたる教員一人一人にかかっているが、能力のある個人が意欲的、創造的に取り組むだけでなく、様々な教員が「つながり」の中で自己の使命を自覚し実践することを今後さらに大切にしていかなければならない。

山形大学附属学校園が共通に取り組んでいる「探究型学習」については、県教委重要事業の協力校になることにより、地域とのつながりだけでなく、各附属学校園がつながることになった。また、各学校園で研究的に取り組んでいるカリキュラムの創造は、新学習指導要領において取り組むべき重要事項であるが、地域の学校等が四苦八苦しているだけに、今後さらに大学との共同研究が必要である。経営と研究の一体化の中で、教員一人一人の「カリキュラム・マネジメント力」が求められる。

III 山形大学附属学校 研究・連携推進委員会規定

○山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

(平成 28 年 4 月 1 日制定)

(設置)

第 1 条 山形大学附属学校運営規程第 8 条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として、山形大学附属学校研究・連携推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第 2 条 委員会は、附属学校における研究を推進し、かつ、附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第 3 条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 大学と各附属学校との連携した教育研究及び実証の推進に関する事項
- (2) 公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項
- (3) 附属学校間の連携の基本の方針に関する事項
- (4) 附属学校合同研修会に関する事項
- (5) 幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項
- (6) その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第 4 条 委員会は、次に掲げる委員で組織する。

- (1) 附属学校運営部長
- (2) 附属学校運営副部長(研究担当)
- (3) 附属学校運営副部長(教育実習担当)
- (4) 主担当教員として地域教育文化学部に配置された教員の中から選出された者 3 人
- (5) 主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者 1 人
- (6) 附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)
- (7) 附属学校的教頭
- (8) 各附属学校研究部長
- (9) その他委員会が必要と認める者

2 前項の第 4 号、第 5 号及び第 9 号に掲げる委員の任期は、2 年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、前条第 1 項第 1 号に掲げる委員をもって充てる。

- 2 委員長は会務を掌理し、委員会を代表する。
- 3 委員長に事故があるときには、前条第 1 項第 2 号に掲げる委員がその職務を代理する。

(会議)

第 6 条 委員会は、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。

3 委員会の議事は、会議に出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

4 前項の場合において、委員長は、委員として議決に加わることができない。

5 委員長は、審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

(部会)

第 7 条 委員会の下に、次の 3 つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

(1) 共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し、実施する。

(2) 幼・小・中連携部会

附属幼稚園、附属小学校及び附属中学校の連携について計画し、実施する。

(3) 特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し、実施する。

(事務局)

第 8 条 委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し、委員会運営に必要な庶務を行う。

(その他)

第 9 条 この規程に定めるものほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

1 この規程は、平成 28 年 4 月 1 日から施行する。

2 次の規則は、廃止する。

(1) 山形大学附属学校研究推進委員会規則(平成 17 年 3 月 7 日制定)

(2) 山形大学附属学校連携委員会規則(平成 21 年 6 月 1 日制定)

IV 資 料

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める部会に関する申し合わせ

平成31年4月24日

附属学校研究・連携推進委員会了承

1 目的

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める「共同研究推進部会」、「幼・小・中連携部会」、「特別支援連携部会」の各部会の運営について、下記のとおり申し合わせる。

2-1 共同研究推進部会

- (1) 大学と附属学校の共同研究を推進することを目的とし、大学教員及び附属学校教員で構成する。
- (2) 共同研究推進部会は、下表に示す(1)国語教育から(14)養護までの研究部会で構成する。
- (3) 研究部会への所属については、原則年度初めに附属学校研究・連携推進委員会において確認する。
所属確認は附属学校教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。
- (4) 地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの研究部会に積極的に所属するものとする。附属学校教員は原則いずれかの研究部会に所属するものとする。地域教育文化学部以外の教員についても、研究部会員の推薦に基づいて研究部会に所属することができる。
- (5) 各研究部会は2人以上で構成し、各研究部会に大学教員の中から選出した部会長1人を置く。
- (6) 研究部会の設置及び改廃等に関する事項は、附属学校研究・連携推進委員会において決定する。
- (7) 各研究部会は、年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い、年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各研究部会の研究テーマは、各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや、他の主体的研究テーマとする。
- (8) 研究部会に所属する大学教員は、各附属学校の公開研究会において、指導助言者ではなく、共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

【研究部会の構成】

- | | | |
|-------------|-----------|-------------|
| (1) 国語教育 | (2) 社会科教育 | (3) 算数・数学教育 |
| (4) 理科教育 | (5) 音楽教育 | (6) 造形美術教育 |
| (7) 保健体育教育 | (8) 家政教育 | (9) 外国語教育 |
| (10) 幼児教育 | (11) 道徳教育 | (12) 生活科教育 |
| (13) 特別支援教育 | (14) 養護 | |

2－2 幼・小・中連携部会

- (1) 附属幼稚園、附属小学校、附属中学校の連携について具体的に計画し、実施することを目的とする。
- (2) 幼・小・中連携部会は、附属学校運営副部長（2人）、学部選出の研究・連携推進委員会委員（1人）、幼・小・中の各教務主任（3人）、コーディネータ（3人）、各研究部長（4人）で構成する。
※座長は、研究担当の附属学校運営副部長が務める。
- (3) 部会の開催は、議題に応じて、次の方法のいずれかとする。
 - (a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）
 - (b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会＋特別支援連携部会の連続開催）
 - (c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催
- (4) 附属小学校を主幹校とし、作業部会の議題の整理、会議の案内、進行等を務めるものとする。

2－3 特別支援連携部会

- (1) 附属特別支援学校と幼・小・中との連携について具体的に計画し、実施することを目的とする。
- (2) 特別支援連携部会は、附属学校運営副部長（2人）、学部選出の研究・連携推進委員会委員（1人）、幼・小・中・特の各教務主任（4人）、コーディネータ（3人）、各研究部長（4人）で構成する。
※座長は、研究担当の附属学校運営副部長が務める。
- (3) 部会の開催は、議題に応じて、次の方法のいずれかとする。
 - (a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）
 - (b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会＋特別支援連携部会の連続開催）
 - (c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催
- (4) 特別支援学校を主幹校とし、作業部会の議題の整理、会議の案内、進行等を務めるものとする。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

(平成31年4月1日現在)

	氏 名	現 職
委員長（1号委員）	鈴木 亨	(附属学校運営部長)
委 員（2号委員）	中井 義時	(附属学校運営副部長)
委 員（3号委員）	佐藤 博晴	(附属学校運営副部長)
委 員（4号委員）	佐川 鑿 野口 徹 鈴木 宏昭	(地域教育文化学部教授) (地域教育文化学部教授) (地域教育文化学部准教授)
委 員（5号委員）	森田 智幸	(大学院教育実践研究科准教授)
委 員（6号委員）	村上 ゆかり 樋口 潤一 小関 広明 高橋 真琴	(附属幼稚園長) (附属小学校長) (附属中学校長) (附属特別支援学校長)
委 員（7号委員）	高橋 浩 早坂 智 村上 未紀	(附属小学校教頭) (附属中学校教頭) (附属特別支援学校教頭)
委 員（8号委員）	倉岡 寿幸 江波 大 高嶋 裕也 近藤 真知子	(附属幼稚園研究主任) (附属小学校研究部長) (附属中学校研究部長) (附属特別支援学校研究主任)
委 員（9号委員）	片山 敬子 渡邊 弘晶 関東 朋之 片桐 瞳 早坂 美紀 鎌田 弘子 佐藤 大将	(附属幼稚園教務主任) (附属小学校教務主任) (附属中学校教務主任) (附属特別支援学校教務主任) (特別支援教育コーディネータ) (メンタルケアコーディネータ) (英語教育コーディネータ)

※4号、5号及び9号委員の任期は2年 (H30.04.01～H32.03.31)

編集後記

大学と附属学校園との共同研究・連携活動の更なる充実を目的として組織の編成が行われ、「附属学校研究・連携推進委員会」が発足して4年目、連携活動としては11年目となる。

全国の附属学校園に少子化や財政緊縮の波が押し寄せるなか、附属学校園の存在意義や役割を問われて久しい。附属学校140年の歴史を振り返りつつ、より社会に貢献できる存在であり続けるためにも、先進的な教育研究と人材育成に努めていくことが求められている。

今年度の連携活動を振り返ると、いずれの活動にも、子供たちの学びとそこから派生し、対話的な交流の中で生まれる新たな思考を大切にした取り組みが見られる。どれほどにITが進化しようとも、これらの学びの過程で得られる人と人の間に存在する確かなつながりは、何ものにも置き換えられるものではないだろう。未来を担う子どもたちにとってのかけがえのない学びとなるよう、大学と附属学校、そして附属学校園間の連携活動をより一層推進していく必要があるのでないだろうか。

令和元年度 附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属特別支援学校 教頭 村上 未紀

令和元年度
附属学校連携活動報告書

発行日 令和2年3月31日

発行者 山形大学

編集者 山形大学附属学校連携委員会

〒990-0023

山形市松波2丁目7番2号